

パンタナール通信

一般社団法人 南北米福地開発協会 会報 2021年9月1日 216号
世界平和地球村の建設と自然環境の保護



釣り体験



レダのタロイモ田にて

第21回国際協力青年奉仕隊

2021年7月9日～23日 パラグアイ



当会現地法人からマリア・アウシリアドーラ村に頑丈な遊具を贈りました。青年奉仕隊は学校食堂に壁画を描き、柱などを塗装し、庭を整備・整地しました。7月21日撮影



子供たちと遊ぶ



子供たちに文具と服をプレゼント

7月9～10日

羽田空港に男性隊員5名が集合。島田さんから簡単なオリエンテーションを受け、記念撮影をして出発しました。以後、フランクフルト、サンパウロを経由し、40時間ほどかけてアシンシンジョンに到着。佐野先生、中井先生、カタリーノさん夫妻が歓迎してくださいました。そして夕食時に交流の時間が持ち、スペイン語をたくさん教えていただきました！

長旅による疲労や慣れない環境で、体はへとへと気味ですが、文鮮明先生がエデンの園を創ると決意されたその土地に到着で、喜びがあり、心には力がみなぎっています。「神様を愛し、人類を愛し、自然を愛そう。私たちの星をきれいに保とう」という標語のもと、皆で結束して歩んでいきます！

7月11日

ホテルで朝食。日本とは違う食べ物を味わい、隊員一同で盛り上がりました。神様の創造の妙味の一端を食事から感じたのです。その後、佐野先生を中心に今後の活動に向かた

ミーティングを持ち、ロマ・プラタへと出発しました。

6時間の車の旅を経てロマ・プラタに到着。レダから来た女性隊員4名と合流しました。夕方ミーティング、そして夕食。

南米に到着してから日々多くの愛を受ける中、「為に生きる」を体現している先生方や、兄弟姉妹たちの姿にとても感銘を受けています。これから共に奉仕を行う高校生や、村の子供たちのために、私たち青年奉仕隊が愛を与えることのできる、孝情の実践者となれるよう、決意新たに歩んでいきます。

7月12日

きょうは佐野先生を中心に、敬拜と訓説会で一日を始めました。訓説箇所は「道端に咲く一輪のタンボボが、新羅の金の冠より貴い」でした。文先生が、どのようなご心情でこの地を愛されたか、思いを馳せる尊い時間でした。

午前中は、ロマ・プラタの歴史について学びながら、開拓史博物館や学校などの施設を見学しました。15世紀から現代まで、信仰を守り続け、苦しい中でも神様のために歩み続け、町を建設していくメノー教徒の歴史がありました。レダの歴史が後孫に語り継がれる時、私たちもその礎の一つとなれるよう、奉仕隊の活動に完全投入していこうと思います。（次面に続く）

『神様を愛し、人類を愛し、自然を愛そう。
私たちの星をきれいに保とう。』

青年奉仕隊

青年奉仕隊（1面より続く）お昼は食卓を囲み、デリバリーのピザ。午後から男性は携帯のSIMカードの契約を行い、女性は必要な物資を買い入れました。夜は、肉食べ放題の店に行き、これでもかというほどお肉を食べました。こちらが元気に挨拶やリアクションなど、皆



ロマ・プラタの開拓史博物館。7月12日
員の方も笑顔で明るくサーキュレーションをする事で、ビスをして下さり、愛は伝播していくということを改めて実感しました。
生まれも育ちも違う隊員たちが、一つの共通点を持つたが故に集うことのできた我ら青年奉仕隊です。いよいよ明日は念願のレダに向かいます！感謝の心情を忘れずに歩んでいこうと思ひます。



7月13日 朝、文先生の自叙伝より「貧困と飢餓を賢く解決する方法」を訓読しました。「ジヤルジンは私を幸福にしてくれました」という最後の一文に、文先生が南米で歩まれたすべてが凝縮されていました。その後、トロ・パンパ、マリア・アウシリアドーラという町を経て、レダに到着しました。移動中は見渡す限りの草原が続レダ開拓の意義と歴史を学ぶ。

く道でしたが、感動や驚き、様々な気づきがあり、とても貴い時間でした。

レダ到着は夕方の5時頃で、夕食をいただき、先生方やスタッフの皆さんと顔合わせをしました。

夜の祈祷会は満天の星の下、研修所2階のテラスで行いました。皆で一日を振り返り、これから歩みに向けて心情を一つにしていくことができました。



公館訓読室にて。7月14日



レダの公館を訪問。7月14日

A group of young people, likely students, are posed together indoors. They are all smiling and making peace signs with their hands. The setting appears to be a room with windows and curtains in the background.



第1農場を見学。ここは菜園。7月15日



豚ランドを見学。子豚が大人気。7月15日

第ことに心から感謝です！
また夕方と夜には、エスペランサとオリンポの高校生たちが、それぞれレダに到着しました。全員そろって顔合わせをするのは明日ですが、このような環境を準備してくださった神様のためにも、国境、言語、文化を超えて、一つの家族となつた姿をお見せできるよう歩んでいきたいです。（4面に続く）

持続可能な福地建設をめざして(3)

飢餓をゼロに

和田賢



SDGsの飢餓の項目には5つの目標があり、第一番は「2030年までに、すべての人々の飢餓状態をゼロにして、安全かつ栄養のある食料が一年中、十分に得られるようとする」とあります。では、私たちを取り巻く食糧事情を考えてみましょ

インド貧民街の女の子。By Billy Cedeno, Pixabay

う。国連食糧農業機関、農林水産省、総務省人口統計などのデータを参考にして、世界を生徒40人の教室であると考えると、食料不安のない生徒は29・6人、中程度の食料不安を抱える生徒は6・5人、深刻な食料不安を抱える生徒は3・9人だというのです。40人のうち4人が食うや食わずの生活をしているというわけです。

費期限が過ぎたなど、さまざまな理由で廃棄される食品の量は、世界で1年間に13億トンです。そのうち日本では1年間に約612万トンが廃棄されています。その量は何と東京ドーム5杯分です。日本人1人当たりにするとお茶碗1杯分のごはんを毎日捨てていることになるというのです。

さらに深刻なのは、わが国の食料自給率は38%で、62%は海外から食料を買っているのに、廃棄しているのは「ハンパない」というわけです。もはや、世界的飢餓の問題は、私たちの食生活と連動しているというのです。

食品ロスは先進国などに限った問題ではないのです。開発途上国でも食品ロスが深刻です。穀物や野菜を生産しても収穫できなかつたり、食品加工する施設や技術がなかつたり、さらに流通などのインフラが整つていなかつたりしているのです。当然のことながら、その途中で食品が腐つて捨てられている



栄養豊富なタロイモを栽培する水田。レダ第2農場

されています。
このように地球上に飢える人がいるのに、飽食に酔う人、食べ残す人もいるのです。最近よく言われる「食品ロス」を取り上げてみます。

2005年の飢餓人口は8億2560万人でした。その後2014年には6億2890万人と改善されましたが、2019年には6億8780万人と悪化し、2030年には8億

翻つて、私たち南北米福地開発協会が南米のバラのです。ここまでくれば、飢餓は「人災」の色合いを見せ始めます。

翻つて、私たち南北米福地開発協会が南米のパラグアイのレダで進めていくプロジェクトをみてみましょう。食糧危機に対する解決策として、淡水魚・バークーの養殖とエビの養殖、そしてタロイモその他、さまざまな野菜、果実を生産していますが、これらをどう評価すればいいでしょうか。

まず、レダで生活するメンバーや従業員たちの食生活の中で、レダの産物がどの程度取り入れられ、それが全員の健康にどのような働きをしているのか、考慮する必要があります。

さらに私たちの口に入るものののみならず、周辺住



レダに住む人々が楽しみにしているマンゴー。

流通、販売、食事までの一貫した流れの中で、どのように取り組んでいくかという視点も必要でしょう。こうした視点は、現地メンバーの基本的な心構えとして備わっていることでしょう。今、私たちに望まれるのは、明確なプランとその実行です。

食の在り方は、実際の私たちの生活の重要な問題点です。私たちの台所・食卓での食に対する具体的な、食品の節約、備蓄、健康増進などの気配りがあつてこそ、SDGsの「飢餓」への方向性と一致していくのでしよう。さあ、家の冷蔵庫の中身を一度総点検してみましょう。（つづく）

